

第3回 咲洲庁舎の長周期地震動対策に関する専門家ミーティング 概要

■ 専門家の出欠状況（五十音順・敬称略）

| | | |
|-------|---|----|
| 井上 一朗 | 京都大学 名誉教授 一般財団法人日本建築総合試験所 副理事長 試験研究センター長 | 出席 |
| 大川 出 | 国立研究開発法人建築研究所 客員研究員 株式会社東京ソイルリサーチ 取締役 | 出席 |
| 釜江 克宏 | 京都大学 原子炉実験所副所長 教授 | 出席 |
| 川瀬 博 | 京都大学 防災研究所 教授 | 出席 |
| 竹脇 出 | 京都大学 大学院工学研究科 教授 | 欠席 |
| 多田 元英 | 大阪大学 大学院工学研究科 教授 | 出席 |
| 福和 伸夫 | 名古屋大学 減災連携研究センター長 教授 | 欠席 |

■ 意見の要点

【咲洲地区における地震動】

- ハイブリッド合成のマッチング周波数について、今回の場合は、長周期側と短周期側のレベルが揃っているため、どこでマッチングさせても影響ないと思うが、どのような方針で行ったか。
- 差分の計算結果と観測結果が完全に一致しなくてはいけないという訳ではないが、観測記録を見ると、卓越周期は方位・方向によって同じものもあるが、そうでないものもあるということか。
- 大阪平野に効くSMGA（強震動生成域）は、たぶん限られてくると思うが、中央破壊と西破壊では、破壊プロセスが変わってくるため、SMGAの影響も違ってくるという理解でよいか。
- 過去の地震からいうと中央破壊の確率が高いが、本検討のように、西破壊の場合も計算し、考えておくということは大事なことだと思う。

【建物の構造解析】

- N319（長辺方向）とN229（短辺方向）の二方向的な影響はないか。
- この建物は梁降伏型なので、直行二方向の層せん断耐力の相関はあまりなく、一方向ずつ解析しても結果は変わらない。そういう研究成果もある。
- 国交省の地震動で補強設計を行うというのは分かるが、今回推計した地震動でも見ておいた方が良さだろう。